「子どもはみんな問題児。を読んで」　　　　　　　　　　　　　　　　田村 瑠菜

　タイトルが衝撃的でした。たしかに子どもたちに悩まされることもありますが、中川さんがそんなことをいっていいのだろうか、と思い、どんなことが書いてあるのだろうか気になって仕方がありませんでした。読んでいく中で様々なエピソードが頭に浮かんできて「うんうん、そうそう！」「○○ちゃんも似たようなことがあったなあ」とたくさん共感できるところもあれば、「そんな発想ができるのか」「かわいいなあ」と子どもらしさに思わず口元が緩み癒されるところもありました。「問題児」という言葉を聞いて悪口のようなことも書いてあるのかと思っていましたが「どこが問題児なのだろう」と思うことのほうが多く感じました。

　『わが家は三権分立』にはなるほどと思いました。子どもと夫のやり取りに対して中川さんはだまっている、二人のことは二人で解決する、ということは子どものことを一人の人として尊重していて、また、自分のことは自分で解決する、といった対応力にも繋がると思います。ついつい口出ししたくなるはずのやり取りにも見守ることで身につく力があるのだと気づきました。これは年長児同士のやり取りでもいえることだと思います。

　子どもはやはりお母さんがいちばんです。会話の中でお母さんが出てくるととても嬉しそうに得意げに話し、そして大好きなお母さんのために頑張ることができます。その姿にやきもちのような気持ちを抱いたこともありますが、おうちの方のことを思っているときがいちばんかわいいように思います。その姿をぜひ見せてあげたいという気持ちにとても共感しました。

子どもたちと関わる中で難しいこと、悩むこともあります。それが『子どもはみんな、問題児というのは私の持論です。まず、自分がそうでしたから。そしておかしなことに、私の周りの大人たちでおよそ自分はいい子だったというひとはいません。』『そもそも子どもというのは欠点だらけで、自分なりにいい子になっていこうと悪戦苦闘の真っ最中ではないでしょうか。』といった考えに救われたような気がします。どこか納得し、安心しました。「うーん」と思うことも一呼吸おいてみるとかわいらしく見えてくるような気がします。絵本の大切さ、保育者の在り方を学びました。子どもにとってのお母さんの存在について改めて考えました。読んでいてとても癒されます。特に視野が狭くなってしまったり息詰まったりしたときに手に取って何度も読み返したいです。